

「戦艦武蔵の最期」から

大湖 賢一

昨年夏、偶然に「日本人と戦争責任」(高文研、斉藤貴男・森達也共著)を読んだ。するとこの対談本は渡辺清を扱っていた。実はこの夏、これまた偶然に神田の三省堂書店で、渡辺清「戦艦武蔵の最期」を見かけ、ためらわずに購入していた。偶然というか邂逅と考えるべきか迷うほどだった。

多くの方は「存じかと思うが、渡辺清は高等小学校卒業後、海軍に志願。一九四二年から戦艦武蔵に乗りこみ、レイテ沖海戦における武蔵撃沈から奇跡的に生還。戦後は、日本戦没学生記念会の事務局長をつとめ一九八一年に亡くなっている。著書としては「海の城」「砕かれた神」「私の戦争観」などがある。「戦艦武蔵の最期」は、若干一九歳当時の渡辺清の体験を基に書かれた小説で、一九七一年に朝日新聞社から出版され、一九八二年には朝日選書として再出版されたが絶版。そして私が今回手に入れたのは絶版本を対象としたオンデマンド版であった。

この本との最初の出会いは、一九七三年の横浜市立南中学校の図書室であった。当時軍事方面に没頭していた軍国「オタク」少年だった私は、その題名に着かれて戦記物の一冊だと思い手に取った。しかしそこに描かれていたのは、血と汚物と非情さに凝り固められた戦場の実相であった。図書室にしてはやけに夕日がまぶしい部屋の風景とこの本との出会いから私自身の思想らしきものは形成されていったように思う。その意味で、自分の原点と久しぶりに向き合う体験であった。

戦艦武蔵は、大和級戦艦の第二号艦として一九三七年度に計画が承認され翌年三菱重工業長崎造船所で起工。アジア太平洋戦争が始まった後、四二年竣工。四三年二月にトラック島に到着し初めて連合艦隊旗艦となる。しかし五月には戦死した山本五十六長官の遺骨を載せて日本へ。その後、再びトラック島へ。四四年六月にマリアナ沖海戦に参加し初めて

実戦を経験。一〇月にレイテ沖海戦に参加し二四日に沈没した。わずか二年二ヶ月しか稼働しなかった戦艦だ。

最近、戦後何度目かの大和ブームが起きた。映画「男たちの大和」が公開され、呉市には「大和ミュージアム」が開館し予想以上の人手を集めている。大和は、日本を代表する側面をもった名前、最後に見込のない海上特攻によって滅びた悲劇性から文学作品や映画に何度も取り上げられてきた。

そのなか戦艦武蔵は何故か忘れられているように思える。武蔵は誇るべき戦果もなく映画の題材にもなったりはしない。吉村昭の名作「戦艦武蔵」(新潮文庫)に描かれたような民間造船所で苦勞の末に造られた技術的成果は省みられることも少ない。いわんや横須賀造船所で建造され途中から空母として生まれ変わった三号艦信濃について語られることはほとんどない。

戦中派渡辺清は、地獄のような戦場から生き残ったことを悔やむ。何故生き残ったのか。またこの戦争を始めたのは誰か。そして天皇は何故責任を取らないのか。生き残った日本人は天皇の責任を問わないのか。その問いについての回答は戦後、さまざまに論じられてきた。その著積から学ぶことは大変重要である。しかしその原点を私たちはとかく忘れがちである。三笠にしても大和、武蔵にしてもとかく兵器の姿は美しい。しかしその美は、人を殺すという機能性から生まれた美しさだ。

今年度からわれわれは「横須賀市史」の史料に向き合うことになる。戦争期の横須賀の姿にたどり着くのは何年もかかるであろう。戦争期の地域のあり方を考えることもそろそろ着手すべきかもしれない。その際にも史料の向こう側にある戦争の実相を忘れずに取り組んでいきたい。

(京浜歴史科学研究会事務局員 二〇〇八年一月六日記)